

# 中宮（石川県，吉野谷村）における ニホンザル伝承にみられる自然観の変遷

広 瀬 鎮 （財）日本モンキーセンター

## ON SOME CHANGES OF NATURAL FEELINGS, APPEARED THROUGH JAPANESE MONKEY-LORES IN CHUGU, YOSHINO-DANI, ISHIKAWA PREFECTURE

Shizumu HIROSE, *Japan Monkey Centre, Aichi*

### はじめに

白山麓の住民間に残留しているニホンザルにかかわる民間伝承の収録をはじめてから10年を経過している。石川県下，白山麓の各村落を訪れ，さまざまな形で野生動物としてのニホンザルに出合った人たちから，サルとヒトとのかかわりをめぐる民俗について今日まで丹念に聞き込みをおこなってきた。本報告は，第1回の聞き込み調査後，6年を経た昭和53年（1978）に試みた第2回調査の報告をおこなうものである。調査地域は，石川郡吉野谷村中宮である。1977年現在の中宮は世帯数83戸，その人口内訳は男が136人，女が168人合計304人であり，世帯平均3.7人となっている。当地域における限られた少人数のインフォーマントからの聞き取りではあるが，情報提供者個々にわたる過去からの自然観や，動物観の継承に，かつまた自然知識の蓄積に地域の特質ともいうべき内容をみい出すことができた。白山麓（環白山帯）をめぐる生物とその自然環境および人とのかかわりについて

表1 吉野谷村の人口

部 落 名	世 帯 数	人 口 (人)			世 帯 平 均 (人)	有 権 者 数 (人)
		男	女	計		
中 宮	83	136	168	304	3.7	247
木 滑 新	24	52	41	93	3.9	69
上 木 滑	40	78	79	157	3.9	124
下 木 滑	20	47	46	93	4.7	65
市 原	48	91	101	192	4.0	141
瀬 波	52	93	125	218	4.2	174
佐 良	29	55	57	112	3.9	90
上 吉 野	78	101	170	351	4.5	247
下 吉 野	57	106	123	229	4.0	172
合 計	431	839	910	1,749	4.1	1,329

（吉野谷村村勢要覧，1977より）

の調査研究は、白山調査研究委員会人文班において引つづき継続されており、本論は、中間報告である。

## 白山麓中宮地区におけるニホンザル伝承, 1972

### —第1次中宮地域聞き取り調査—

白山麓の住民間に伝えられているニホンザルの民間伝承、および今日の口承話題についての民俗学調査は、1971年以後すすめられてきた。調査内容は年を追って今日までに石川県白山自然保護センター調査研究報告書各号に報告されている。これまでの調査の主眼は、ニホンザルに関する民間伝承を収録し、その内容を明らかにし、これを分析して、比較民俗学の立場からの地域比較を試みることにあった。

ニホンザルとサルにかかわった口承が他地域に比して多く残され、出作り耕作が行なわれていた時期におけるの作物に対するサルによる食害は、「サル追い」の伝承として白山麓各村落に定着していた。また一部の狩猟経験者間における言葉のうえでの禁忌や、サルを用いた薬用利用の習慣は広くひろまっていた(広瀬・水野, 1973)。それは、サルに関する民間伝承調査を、衣・食・住・信仰・生業・狩猟など18項目におよぶ質問アンケートにみられた解答から推定されたのであるが、このアンケート調査に先行して1972年中宮地区のニホンザル民間伝承の聞き込み調査がおこなわれたのである。その時点においても、中宮地区においては、ニホンザルを信仰の対象とする心意伝承の残留をみい出すことができなかった。その後、祭礼識にホウカとよばれる「くくりざる」が残留していることが、山本重考氏他の調査で明らかとなっている(広瀬, 1980)。しかしながらサルの頭の

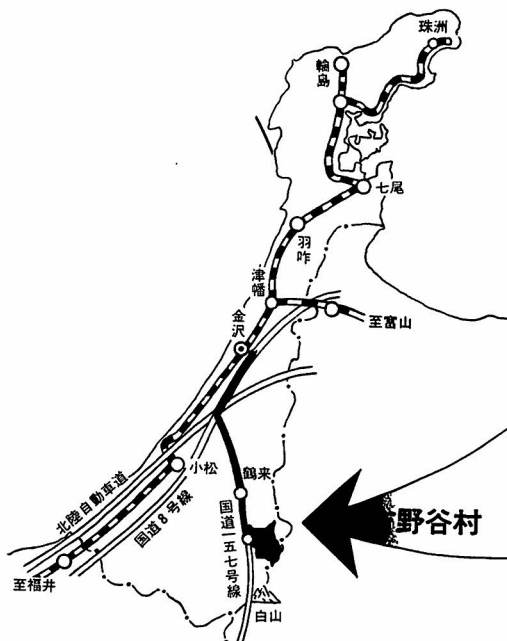


図1 吉野谷村位置図

黒焼の薬用利用については第1次調査(1972年6月)時においても伝承の収録が行いえたが、アンケート調査によって吉野谷村字瀬波SH氏および同村市原のMN氏の解答からサルの頭の薬理効果が明らかに伝承されていた。さらに薬用として小腸が使用され、サルが商取引の対象となったことが、明らかとなった。したがって1978年1月21日に実施した中宮地区でのニホンザル民間伝承の収録の結果とを比較分析することによって、自然環境や社会の構造変化とかかわった住民の動物観、物質価値観の意識変化をも追跡することが可能になると考えている。

すでに1971年9月石川県社会教育センターにおいて白山麓における民間伝承聴取の研究会が実施されていたが、1972年6月24・25両日の尾添・中宮地区における丸尾好子氏、林与享・林のぶ3氏によって、実生活のなかに話題となったニホンザルとのかかわりが克明になってきたのである(広瀬, 1972) ①出作りとニホンザル, ②禁忌伝承とニホンザル, ③薬用にされたニホンザル等の3点が考察されていた。しかもインフォーマントにとっての野生ニホンザルは、実生活において、遠い過去の存在ともなっていたのである。

## 白山麓中宮地区におけるニホンザル伝承1978

### —第2次中宮地域聞き取り調査—

吉野谷村下吉野地区の住民の一部ではあるが、自然意識、動物観等についての調査を進めたが、1978年以後の白山調査研究委員会人文班広瀬チームにおいては、小規模ではあるが意識調査を進めてきた。しかしながら1978年1月21日の第2次中宮地区ニホンザル民間伝承調査では、従来のサルを中心とした住民とのかかわりを主として聞き取りをおこなったが第1次調査の欠陥をおぎなってニホンザルに加えて、その他哺乳動物に対する明治期以降の動物認識もあわせて調査対象とした、キツネ・ウサギについての地域における増減も聴取できたのであるが、環境変化と野生動物のかかわりに関しては極めて強い環境汚染、公害との関連意識を有していた（広瀬、1978）。

第2次調査は中宮地区の外一次氏宅においておこなわれたが、インフォーマントおよび聞き手の氏名は以下のとおりである。

インフォーマント：1. 古田ツル（明治23年9月20日生）、女。2. 加藤スワ（明治26年5月10日生）、女。3. 宮川与八（明治30年9月10日生）、男。4. 外一次（明治41年12月31日）、男。5. 瀬川又吉（明治44年3月31日）、男。

聞き手：1. 広瀬鎮、日本モンキーセンター。2. 山本重孝、吉野谷村文化財保護委員。3. 高桑守史、白山自然保護センター。4. 真野哲三、石川県白山ろく少年自然の家。

なお、聞き取りはテープによる録音もあわせおこなったが、ニホンザルの民間伝承については、以下の諸点を中心に聞き手は自由な立場で聞き取りをおこなった。①サルと生活のかかわり、②サルについて思うこと、③サルについての知識、④中宮地区のサルの伝承、また、第2次調査では女性インフォーマントからの聞き取りができ、男性インフォーマントとの関心度差が明らかとなり、今後の調査への手掛りをえた。インフォーマントと選定については外一次氏および山本重孝氏の御協力をえた。同地区では1977年現在、男25名、女39名が60才以上の高令者であるが、中宮白寿会（会長山田一太氏）幹事である外一次氏は、第2次調査にきめこまかい配慮と御協力を示された。第1次、第2次調査を通じて明らかとなった中宮地区住民の動物観、価値観についてまずとりあげてみよう。

### 民間伝承の聞き取り

吉野谷村におけるニホンザル民間伝承調査は直接古老の聞き取りとアンケート調査の二方法をもって試みたのであるが、収録しえた伝承事項はインフォーマント数がすくないこともあって、十分に地域伝承の全貌を明らかにしえたとは考えていない。吉野谷村はいわゆる白山麓北部に位置しており、東は飛騨白川村で越中上平村に界しており、西は手取川の峡谷に沿って細長い地勢である。住民の居住地区は地形とかかわって民間伝承の流布、継承、その形式にも地域差の生じることは推測しうる。高峰峻巖の地として知られる同地域は、近年豪雪対策としての村道の改良、流雪水路の整備、除雪機の導入がすすめられているが、いずれにしても冬期の降雪は、住民の生活に長年の間強い影



図2 中宮の村落

響を与えてきた。また近年みる機会の少なくなった出作り耕作に対する食害獣として考えられてきたニホンザルの伝承は姿・形を変えて今日まで継承されている。花井(1979)は、白山地域では多雪と急傾斜という自然条件が、結果的に今日まで豊かな天然林を温存させており、本州産の陸上哺乳類中、特殊な例を除けば、シカとイノシシのほかほとんど全てが生息していることを明らかにしている。

とくに中宮地区におけるニホンザルに関する聞き取りは、インフォーマント自身の自然観や動物観が具体的に現われるように留意して行なった。高桑守史班員は、中宮における養取を中心とした民俗研究をすすめ、白山麓山村社会における「家」の展開と村落構造を明らかにしつつあるが(高桑・高桑, 1978)ニホンザル民間伝承面においても中宮地区外からの流入された伝承事例として、庚申・山王にかかわるサル<sup>イヌ</sup>の心意伝承がみうけられ、村落構成員の一員でもあるインフォーマントの社会的体験、とくに中宮地以外での生活体験との関連を知ることが必要であると考えている。

第2次調査では中宮地区における野生生物全般にわたっての聞込みを行なったが、女性インフォーマントからは野生鳥獣に関して、ヤマイヌ(オオカミ)をめぐる伝承残留をのぞいては聴取できなかった。地区住民の自然観、動物価値観、動物知識等に関しては次回調査において、家族、世代間の相違を対象として調査を実施する予定である。地域住民の生活にかかわった野生動物の評価は、個々のインフォーマントの生活体験によって異なり単一ではない。サルについてとりあげてみてもその相違は著しい。一例にサルの毛皮の評価をとりあげてみても瀬波地区にくらべて中宮地区での評価は大きくないことが判明している(広瀬・水野, 1973)。また中宮地区住民にとってニホンザルが、近年蛇谷の野猿公園において一般に公開されたことは、サルへの関心度を著しく高めた。しかしながら、中宮地域のサルについての古くからの伝承を収録してみると、サルの移動と気象の変化とむすびつけた民間伝承が、濃厚に出現して特色となっている。生物と環境を意識した住民の潜在的な意識をそこにみるのである。中宮地域は平年積雪が247cmであり、1945年は480cmの積雪をみている。サルと降雪をめぐる伝承は同地区の特色であろう(金子, 1785)。

吉野谷村は人口推移をみると1960年の2,452名から1977年の1,735名にいたるまで減少の一途をたどってきており第一次産業従事者も減少した(図3・図4)。したがって野生動物との直接接触者からの聞き取りも年々困難となってきている。手取川ダム工事によるダム周辺の哺乳動物の分布には変化が生じてきて、今日では同地区周辺はニホンザルのムレの存在は知られていない。しかし、1973年桑島地区では畑への食害がサルによって引おこされ駆除が話題となったことがあり、これが示すように以前は手取川周辺の集落にもニホンザルが接近したのである(花井, 1979)。中宮地区における聞込みにおいてもニホンザルと住民との出会いのもつ意味を考慮しなければならないと考える。

中宮集落に接して杉植林地がひろがり、上部は天然林である。白山自然保護センター及び白山調査研究委員会サル班の調査によってニホンザルの生息分布と移動の実態が明らかになっている。これは地区住民の動物観形成に深い関連性をもっているのである。1970年10月11日に中宮にニホンザルが接近し、中宮村近くのカキ・ナシに集中した。この群れはオダニとタイコのムレであると報告されている。筆者の第1次聞き取り調査は1972年であり、林与享・のぶ(伊沢, 1971)もこれについてふれていた。



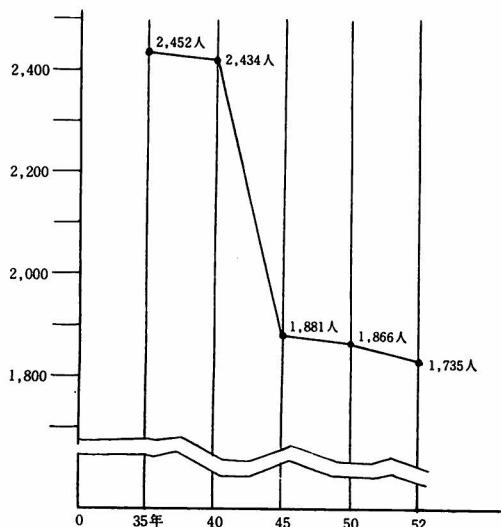


図3 吉野谷村年度別人口の推移  
吉野谷村村勢要覧(1977)より

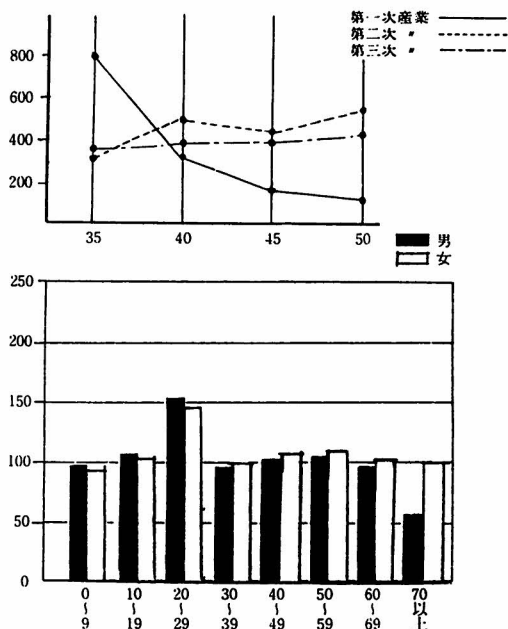


図4 吉野谷村産業別就労人口  
吉野谷村村勢要覧(1977)より

### 動物観

中宮地域第1次調査において、林与享・のぶ両氏は中宮村にあらわれたサルをこわいとは意識していない。また村民はサルを怖れていないとのべている。村民にとってニホンザルが生活に直接対立する存在とはなっていない。また一般村民の間にはとくに強いサルをめぐる禁忌は伝わっていない。また、1973年アンケート調査において畑与吉氏は、出作り耕地におけるサル追いについて詳細を語っているが、これは白山麓に広く伝わっている人間の側のサル追い行動である。夜明前からブリキ缶等を叩いてサルをおどろかせて追ったのであるが、伝承としては、「サックリをかぶって葬式のまねをする」が流布されていた。第2次調査においては5名のインフォーマントからはサル追いの伝承は全く聞くことがなかった。今回の調査で、宮川与八氏からは、かつて不猟をさけて、「サル」という言葉を忌んで使用しなかった、狩猟に関連した云い伝えも現われなかった。蛇谷のサルについては外一次氏からの聞込みが中心となり、しかもニホンザルの行動、また個体についてのがのべられている、インフォーマントの今日的関心の所在が反映されているものと考えている。野生動物への関心は、はるかに遠いものになっており、特別な動物観の抽出にはいたらなかった。これは生業や職能にかかわって強く、動物が、地域住民間では意識されることを物語っているものと思う。高令者における意識残留としてのサルについては、今後は記述方式による調査も平行して行いたい。高令者の場合外一次氏をのぞいて日常的にニホンザルと接してはいないのである。ニホンザルを素材として人獣交渉の歴史を調査し、復元することを主眼とした民俗調査は里接域の動物量の変化や民間信仰に表出される動物・兆禁占呪に現われる動物、狩猟の推移などを主として聞き書調査を継続しなければならないが、今後は蛇谷園地のニホンザルのムレの存在と住民の関心度調査も重要なものとなって行くものと考察する。

第2次調査においては、聞き取り調査時間の制限もあって(急な降雪が調査日夕刻よりはじまった),

白山麓山村ではサルコ、ホーカなどの祭祀用具として存在するサルの民間信仰上の興味ある造形物に対する確認等は次回にもちこまれた。

住民の動物観の理解はきわめて調査の困難な領域に属してはいるのであるが、情報の数量化を可能な限り長期にわたってすすめ、蓄積しなければならない。とくにインフォーマント個々の山村住民としてのライフ・ヒストリーを中心とした個人の成長過程の歴史的把握が必要となってきた。自然環境の変化の歴史過程の把握も今後の研究課題である。先述の高桑守史の中宮における村落構造の実態の把握をめざした親族・婚姻・本分家・祭祀、つきあいをもりこんだ調査研究の成果がまたれる。したがってニホンザルをめぐる動物観も他の動物への動物観の変遷も村落の構造、社会構造の実態と、近代以後の村落史を絡め、これとインフォーマントのライフヒストリーとのつきあわせを今後ともおこないたいと考えている。



図5 中宮居住地から山地をのぞむ



図6 中宮部落の火の用心「火番」

生業による土地利用空間利用、動物接触の同時代的・歴史的な相違こそが、主としてかわりをもった哺乳類にもちがいをもたらすのであって、ニホンザルの民間伝承の構造分析の基点はここに求められているといえよう(広瀬, 1978)。

### 捕食と価値観

第1回聞き取り調査では、中宮地区においてはサルの捕獲の経験談についての聴取はなかった。しかしながら「サルはあまり銭にならない」という口承は得ていた。その後の年月の経過のなかで中宮地区周辺においても、サルの狩猟にかかわる情報も収録されはじめてきた。昭和初期に岐阜県側の猟師たちが入ってきたり、また同時期に富山県からの猟師が石川県下白山麓で狩猟を行ったことが伝えられている。だが、中宮においてのサルの捕獲、肉食の話題はあらわれなかった(広瀬, 1973)。第2次調査において、食用二方法についての口承例に接した。いまだ、同地区におけるサルの捕獲・配分等をめぐる狩猟とかかわった伝承は、十分に収録されていないので、狩猟とかかわった人びとの動物観や、信仰などのかかわりは明確ではない。犀川上流域の一部村落や、瀬波川上流域村落の例から見るとサル食用の規模は小さいものと考えられる。

また、サルをめぐる価値観として、サルの皮が、価値あるものと認められておらず、中宮地区では皮の評価は、クマ、カベジシ、テン、キツネの順であり、サルがそこにふくまれていない。理由の一つはサルの毛皮が薄いからとされていた。動物価値における地域差の存在を今後も調査したいと考えている。またすでに白山ザルとして知られるサルの頭の黒焼きが1948年前後に金沢市内東別院門前

や漢方薬屋で高価で取引きされていたことが伝えられている（広瀬・水野，1973）。

### 吉野谷村におけるニホンザル伝承成立の背景

吉野谷村は古くから中宮温泉を訪れる人びとの心にその美しさが伝えられてきた。蛇谷川はイワナの宝庫とされている。近年スーパー林道開設工事による蛇谷や、蛇谷川周辺の自然の変化は著しい。猿が浄土から冬瓜山一帯を遊動していたニホンザル自然群が1962年4月に餌付けされて後1966年9月一般公開がはじめられた。野生のたくましさ、美しさ、やさしさ等と蛇谷の自然の紹介が吉野谷村当局によって活発となったのもこの頃からであり、「白山ザル」のイメージは、科学的な関心を背景として、よりあらたな口承を生み出しつつあるのが現状であり、第2次中宮調査でもその片鱗をうかがいしることができた。

吉野谷村は、また古くからの信仰の山白山への登山道の拠点として知られ、信心深い人たちによって支えられ村落形態の基礎が礎かれてきた。現在の吉野谷村は、手取川沿岸にそい細長く田畑があるだけでその他は山林である。村の総面積142.58km<sup>2</sup>のうち宅地は0.25km<sup>2</sup>となっている。吉野谷村におけるいくつかのニホンザルに関する民間伝承や、民間に伝わる伝説の成立・継承の背景となった



図7 中宮の村落図

自然環境は、人びとの環境と自然物への働きかけと関連して伝承を特色づける。すでにのべたごとく吉野谷村は、北陸の豪雪地帯であり、インフォーマントのいずれもが、ニホンザルの移動と降雪、なだれにかかわった伝承を知っていたし、出作り生活とかかわったニホンザルと関連した伝承は消えることなく存続されている。中宮温泉の発見にまつわる白鳩伝説には、山を聖域として白い鳥を神聖視する自然観がみられたのであるが、サルの霊威、白猿伝承（広瀬，1978）にかかわる民間伝承にはいまだ接していない。

住環境としての中宮を考えるうえで江戸期には72戸であってこの72戸が温泉の年貢として湯高分割のもとに所有する湯株制を発達せしめてきたと伝えられる（松山，1973）が今日では中宮は83戸（1977）あり、当時からは11戸の増である。吉野谷村村勢資料によれば、1977年現在中宮の人口は男136人、女168人である。村に伝わる動物や自然をめぐる観念の抽出には今後とも女性のインフォーマントからの聞き取りが必要である。伝承残留の地域比較も地域住民の構成実態とインフォーマントの選定と関連して試みたいと考えている。今日、吉野谷村の基幹作物は稲作であるが、山間冷地の特性をいかす花菓物に力をいれており、森林資源の開発がすすみ、林業構造改善事業が活発である。したがって野生哺乳動物をめぐる接触は住民間においてもとぼしく、産業就労人口にみる第一次産業就労者は1960年の800人から1965年の350人、1970年の200人、1975年の180人と年々の減少をみている。野生鳥獣とのかかわりをもつ生業者の急速な減少とともにニホンザル等、野生生物に関する関心は生業との関連性を稀薄なものとしている。ところが、これと逆行して、中宮地域で聞き取りをおこなった5名のインフォーマント間では、内在するニホンザルへの関心と興味は、蛇谷園地におけるニホンザルに傾斜していて、多種の今日までの捕食薬用等の伝承を維持継承し、それが増幅に役立っていると考えられる。

### 吉野谷村におけるサルの伝承

#### 小松近郷巡見道之記と吉野谷村の猿鏡伝承

江戸時代末の文久3年（1863）における下吉野、上吉野村等の白山山麓地帯の山麓の村落の様子、自然、生物にわたる状態を記録したものに横山政和著「小松近郊巡見道之記」がある。1972年調査時、吉野谷村下吉野の山本重孝氏による写本を読了した。横山蔵人政和については、「加能郷土辞集」（日置謙編）にのべられている。横山政和は天保5年（1834）に生まれ、明治26年に没した。「小松近郷巡見道之記」は文久3年（1863）政和30才の時の道中記である。この記述書において横山政和は道中における周囲の自然に強い関心を示しており、自然の中の生物の生態や、捕獲の話題等を記録していた。同巡見道之記によれば、「尾小屋村の項」に野生のサルのについての記録がある（広瀬・水野，1973）。

「一前略一又峠ノ間ヨリ三湖小松辺見ニ峠ヲ過正面ニ公領杖ノ高ノ崖見ニ此頃粟多シ峠ノ右谷ノ向ナル高ク近キ山ヲ大倉ヶ岳ト云其谷ヲ岩底ト云猿多シ一後略」とある。この記録は大倉ヶ岳にサルが生息していたことを明らかとしている。このようにサルについても記載した横山政和の「巡見道之記」の過程にある吉野谷村は、現在までの調査では、ニホンザルをめぐる民間伝承としてのサルに関する信仰や、禁忌をめぐる心意伝承については知見を得ていない。これは白峰地域と対比してみると、白峰地域にサルへの侮蔑嘲笑や、サルへの恐れなど住民の動物観念、生業に関連したニホンザル民間伝承が伝えられているにもかかわらず伝承残留に大きな相違があると考察される。ところが、現在では全くサルの出没が話題とならない下吉野にサルにまつわる伝説が残されていた。下吉野におけるサルの伝承について山本重孝氏を通じて「猿鏡」の伝説を聞くことができた。

吉野十景が藩制時代加賀藩の観光地であったことは良く知られているが、「吉野十景考」には「寒猿

叫」等の記述がみられ、同地区にもかつてサルがみられたようである。「文久3年(1863)8月21日金沢出発翌22日小松着三坂峠」と題した「巡見道之記」に釜清水村についての記述があり、「猿鏡」の地名が現われる。釜清水村の川岸には釜のごとく清水が湧出する場所があり、その所の湧を猿鏡といていた。山本重孝氏の記憶によれば、戦前までは吉野十景中心に位置する黄門橋には老猿が1匹すみついていて時々出てきたという。この黄門橋下流100mの底にサルカガミと呼ばれる場所があって、文政年間(1818—1829)に加賀藩士の田辺正己が書いた「名所街道記」に「猿鏡」とも記載されていて「屈」と「鏡」の2字が当てられている。伝説は、サルが何十匹もつらなって湧の下の水に映る月をとろうとして、水におちてしまったという民話が残っていて「猿鏡」の名の由来を語る。猿猴掬月伝説の典型である。かつてこの猿鏡の場所にはマスが沢山みられたといわれているが、東北地方ではサルのことをマスといい猿名のかわりにマスを使用した地名等が多い。

水の湧き出ずるところには、多くのサルの霊観伝承が各地に残留されているが、釜清水村の場合もそれにかかわりがあるろう。サルは清水をみい出す能力があるとされた動物だったので、湧水伝説とこの地形のもつ特色が猿鏡伝承を生み出したものと考えられる。世に知られた吉野十景の地にこの「猿」名の地名が遊客の関心を誘う伝説は今日に伝わっている。

なお、下吉野の近くにある鳥越小学校に7匹のニホンザル像が都賀田勇馬氏によって製作され、白山サルと称するサル像が人気を呼んでいるが、地域住民の云い伝えとして定着するかどうか不明である。

また、吉野谷村における猿名所在については、「猿ヶ浄土」が蛇谷八景にくみこまれている。

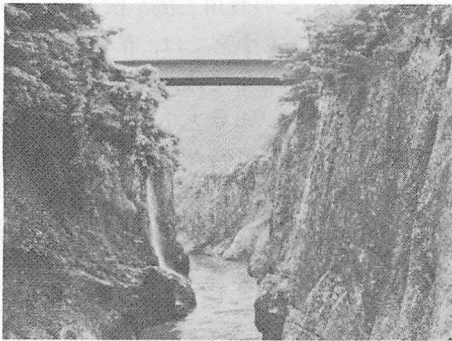


図8 黄門橋

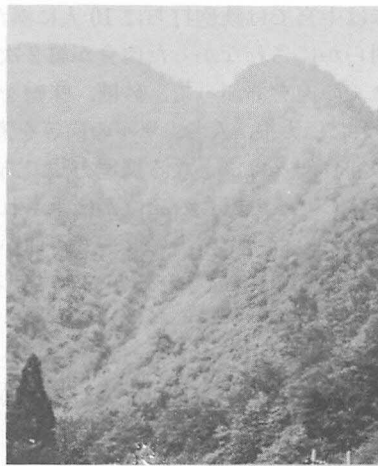


図9 猿ヶ浄土

### 中宮地域のニホンザル民間伝承の特色

中宮地区のニホンザル民間伝承の特色を考察するうえでインフォーマントの情報および具体的にあらわれた民間伝承について明らかにする。

#### ① インフォーマント

第2次の聞き取り調査の対応インフォーマントは5名であったが、すべて明治生まれである。外一氏と宮川与八氏は野生鳥獣への関心がとくに強くみうけられた。ニホンザルとの出会いの印象も強い、1974年の調査で中宮地区住民間での野生ニホンザルとの出会いをめぐって6名のインフォーマン



トからのサルとの出会い例を収録したが、例数も少なく、動物観の抽出にはいたっていない。したがって第2次調査における5名のインフォーマントには以下3点を中心とした聞き取りを計画した。すなわち、1. ニホンザルと他の野生動物情報と地域住民の関心、2. 生活環境の変化と住民の動物観の変遷過程、3. ニホンザルをめぐる禁忌の消滅と生息資料、であったが、女性インフォーマントには答えにくい項目もあった。すでに、1978年中宮地区においては60才以上の高令者数が男・女あわせて64名であり、年々、明治晩期、大正期、昭和初期の白山山麓一円の人びとの生活とニホンザルにかかわった生活伝承は聞き取りの機会を失ないつつある。しかしながら可能な限り、高令者からの聞き取りを続けて行きたいと考えている。

白山麓におけるニホンザルと住民とのきわだった接触面が作り耕作地であったが、近代造林政策、社会の構造変化にともない作りは急激に消滅して行く。白峰地区における長坂吉之助氏(85才)の生活とその意識にみられるその典型的な作り解体と生活観の変化を各所で現出させていると考えている(岩田, 1980)。地域社会村落の近代化は、地方行政その他、治水、山林業施業、国土開発発達の国家行政、産業と経済との関連を有しながら地域住民層に強い影響をあたえてきた。ニホンザルに関しては村落共同体の解体をもたらす昭和初期の森林開発、食料不足からくる動物捕殺等、戦後昭和30年代高度成長経済による土地開発、電源開発ダム工事と関連してニホンザル生息地、その数を減じつづけていた。インフォーマントの居住地における生活改善は野生動物の接近をたちきり、彼等との接触の機会を失わせてしまったのである。第2次調査においては外一次氏をのぞいてニホンザルは過去の口承の話題で、伝承も忘れられようとしていた。

## ②サルの肉をたべる

昭和初期には中宮では鉄砲打ちは10人に満たず、組織的なサルの駆除はやらなかった。1972年第1次調査では明らかにされなかった肉食が第2次調査において聞き取りがなされた。サルの肉は、(1)串ざしにしたサルの肉をあぶって、砂糖、味噌を練ったものにつけてたべる。(2)サル肉はメッタ汁にしてたべる。これは、大根、人参、サルの肉等を煮込んだだけである。この食用二例が伝えられていた。犀川上流域の捕食例とはことなる調理方法である(広瀬, 1979)。しかも中宮では、春のクマ、寒(冬)のカベジン、秋のサルの好食の順位が伝承されていた。なお獣肉をめぐるのは、内尾地区(河内村)と同様に捕獲されるウサギの肉に5~6年前からカズノコ状の肉塊(ツボロとよぶ)がしばしば発見され、食うこともならず、気味わるがられている。サルの捕獲は40年余り行なわれたことがない同地区において、サル肉食の伝承が残されており、しかもサルはすべての部分が使える資源動物と一部でも考えられており、1頭で2貫目の肉がとれたという。サルもクマも共に全くすてるところがないとされていた。狩猟については、「サルを鉄砲でうってもバラ弾は、サルを通さず、うっても弾が体の内に入らない」と語られている。

## ③薬用の伝承

第2次調査において聴取したニホンザル薬用伝承のうちヒヤクヒロについての薬用法について新しい伝承に出合った。これまで伝えられてきた服用以外にヒヤクヒロ(サルの小腸を干しかためたもの)を妊婦の腹帯にはさんでおくとう産が軽くすむという伝承である。また、サルの胃は産薬として服用する場合は、出産後飲ませてはならないとされている。小腸と胃が産薬として伝えられてその薬理効果への期待のほどが伺える。ヒヤク

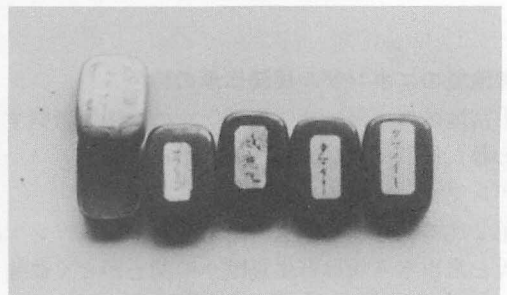


図10 サルの胃(道中薬、江戸時代)(左端)



ヒロは里から嫁に行かせる娘に持参させた。中宮地域においてもサルの頭の黒焼きは貴重な薬物であり、これは蓄膿症に効いた。ヒヤクヒロの値段も高かったが、サルの胃は大正期に米1俵した。

これまでの民間伝承において聞き取ることのできたサルの薬用伝承例のなかで、薬理効果や、薬用方法の地域による相違が、どのようにして生じてきたのかははっきりしないが、ヒヤクヒロの使用法は、心理的な働きとして注目したいのである。

#### ④サルのムレの移動と気象

金子鶴村著「白山遊覧図」(1785)には、天明5年(1785)白山麓尾添村において10月15日朝、しきりにサルのなく声を聞いたとある。「出て東の山を望む、猿狙千白群を為し、或は樹に攀じ或は巖に縁づ、或は其の子を倒負し絡繹として相連り魚貫して北す、之を問うに曰く、山猿は預て雪の避くべきを知る。今歳は必ず大雪ならんか」。鶴村に答えた村人の言は正しかったかどうかはまだ明らかにしていないが、1978年1月の第2次調査では、サルの移動と山の天候とむすびついた伝承をえた。

- (1)ハライ谷上流をサルが渡ると大雪
- (2)ハライ谷をサルが上って行くと天気わるい。
- (3)サルのムレが戻りかけたり、リンズの壁に入ると天気は荒れる。
- (4)サルがタイコの壁に移動すると雪が降る。
- (5)サルはナダレのおこる所にはいない。

このような、伝承に加えて、外一次氏からは、蛇谷園地のサルは雷をいやがる。台風の接近をよく知っている。サルが腰をすえて落着いている間は台風はやってこないと伝えた。また、同氏によると、近年はサルが、煙や、火をこわがらなくなってきた。以前は、蛇谷のサルは煙をととても気にしていたが、最近では関心を示さなくなったとの情報をえた。

第1次調査では中宮におけるニホンザルの行動と気象変化をめぐる、「ブナオ山より下へサルがやってくると雪がふる」、「サルが里へやってくると雨」、「サルがやってくると雪」等、雪と雨とサルの移動行動に関するものが古くから伝承されていたのであるが、外一次氏によると、「蛇谷のニホンザルは変わったが、とくに人間の側にいると安心だという仕草がよくわかる。人間をこわがらなくなってきた。ボスの器量がこまくなってきた。」等のサルに対する印象が、語られ、注目される。インフォーマントたちが、ニホンザルの行動に関連して気象変化をむすびつけた伝承を今日に伝えている点は、ニホンザルという動物の自然適応を考えるうえで、興味もたれる。

### 中宮におけるニホンザルの民間伝承の推移

第一次調査以来筆者は中宮地区におけるニホンザル伝承にいくつかの疑問を抱き続けてきている。外一次氏によると、餌付けしたニホンザルの群れは増加しているが、全体的にいてふえているとは思えないそうである。それは昔はあちらこちらに出たが、現在ではそんな話が少ない。又、サルが出てこなくなったのも中宮や瀬波で出作りがなくなったからであるとして、サルとヒトとの生活域の近接関係を指摘している。このことは重要な指摘であるといえよう。すでに筆者の調査によっても、中宮周辺のサルの目撃者の記憶では、特色あるサルとの出会いは、ヒトリザルや、教頭との出会いが印象の中心となっている。サルたちは人間の住むところを良く知っており、その近くに現われるという、中宮地区住民の一部での考察を検討しなければならないであろう。

しかしながら、近年スーパー林道が開通し、他地区のりびともこの中宮周辺を通過し、中宮もまたあらたな交通文化の通過地点として位置づけられて行こうとしている(図、12)。当然ニホンザルの自然群におよぼす影響も大きいと考えられるが、現時点ではサルに関する古伝承は確実に減少して行く



図11 蛇谷園地(野猿公園)での学習

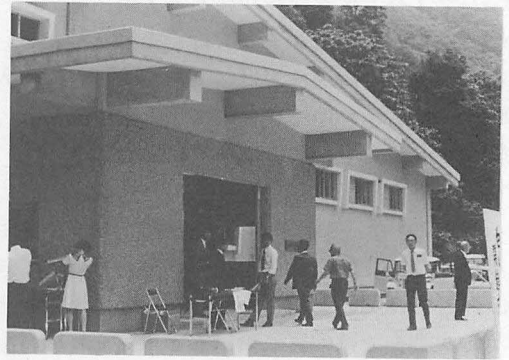
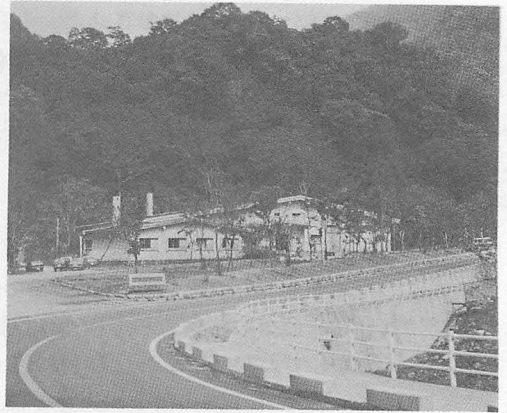


図12 白山自然保護センター

ものと考え。よりあらたな、ニホンザルをめぐる伝承の成立が、古伝承の消滅の手助けをしている感すらある。いかなる現代の口承が、将来伝承化し、地域集団や、血縁集団にどのように継承されて行くかを追跡して行きたい。

第2回の聞き取りにおいては、僅かな事例ではあるが、狩猟にふれた聞き込みがあった。すなわち、「若いサルは鉄砲を知っている」、「棒をかまえても棒では逃げない」というサルの行動に関するインフォーマントの発言ではあるが、かかる口承の存続もまことにあやうい、なぜならば、ニホンザルの捕獲、狩猟がたえて半世紀を経ようとしているからである。ニホンザルの自然生活をおびやかす各種の人為圧力に対して彼等はいかに生きのびて行こうとしているか、そして人間もまたサルに対する対応の仕方を、地域社会の特性において考えようとははじめているからである。

びて行こうとしているか、そして人間もまたサルに対する対応の仕方を、地域社会の特性において考えようとははじめているからである。

## 謝 辞

本論は、中宮地区におけるニホンザルの民間伝承調査の報告であるが、お元気にくらしておられた5名のインフォーマントの方々と膝をつきあわせて語りあえたことは、聞き取り参加者一同の喜びでもあった。

あいにく当日ふり出した雪はわずか数時間のうちに十数cmの積雪となった。最後まで聞き取りにおつきあい頂いた外一次氏御家族の方々にはまことに御礼の云いようがない。

本調査は、石川県白山自然保護センター関係職員の協力、そして白山調査研究委員会の人文班研究活動として実施したものであり、多くの御協力をえた。ここに深甚の謝辞を呈します。また、本報告をまとめるに当たっての吉野谷村長林成行氏、助役谷保俊行氏の多くの御助言に厚く感謝申しあげる次第です。

引用文献

- 花井正光（1979）手取川ダム周辺の哺乳類分布現況．石川県白山自然保護センター研究報告第5集：87—96．
- 広瀬 鎮（1978）ニホンザル伝承分布よりみた白山山麓住民の自然観の特色．文部省環境科学研究報告．
- （1978）ニホンザルをめぐるアニマルロアの研究．今西錦司博士古稀記念論文集，中央公論社，東京
- （1979）犀川上流，二又・倉谷地区にみられたニホンザル伝承の特色——捕食・薬用の生活史——．石川県白山自然保護センター研究報告，第5集：127—141．
- （1980）ニホンザルにかかわる民間伝承における動物観の構造——大日川上流，杖・左礫地区の場合——．石川県白山自然保護センター研究報告第6集：103—114．
- ・水野昭憲（1972）民間伝承におけるニホンザル——尾添川にそって．白山資源調査報告1972年度報告，白山調査研究委員会．
- ・水野礼子（1973）白山麓のニホンザルをめぐる狩猟伝承と尾添川流域住民の動物観をめぐる考察．石川県白山自然保護センター研究報告第1集：21—29．
- ・——（1973）白山麓のニホンザル伝承——サルカガミの話．はくさん，第1巻第2号，白山自然保護センター．
- ・——（1973）薬に使ったサル，はくさん，第1巻第3号，白山自然保護センター．
- 伊沢絃生（1971）白山蛇谷一円に生息する野生ニホンザルの生態学的調査．白山資源調査事業1971年度報告，白山調査研究委員会．
- 岩田憲二（1980）山に生きる——出作り生活を訪ねて——．はくさん，第8巻第2号，白山自然保護センター．
- 金子鶴村（1785）白山遊覧図記．
- 松山利夫（1973）中宮温泉のむかし．はくさん，第1巻第4号，白山自然保護センター．
- 高桑守史・高桑史子（1978）養取の民俗学的研究——白山麓山村社会における「家」の展開と村落構造Ⅰ——．石川県白山自然保護センター研究報告第4集：133—140．
- 横山政和（1863）小松近郷巡見道之記．

### Summary

At present the author is collecting information on Japanese Monkey-lore from the residents of the Hakusan area and the feelings about nature which influence the people.

This time, the author reports on the comparative studies of regional folklore found in the first survey of 1972 and in the second, 1978 survey, and clarifies the character of the results in Chugu Village.

In 1978, the author visited Chugu Village and tried to investigate three areas of monkey-lore through five informants. These areas are individual accounts of Japanese Monkey-lore, feelings about animals among residents, and capturing and eating of monkeys with their material evaluations.

It is very important to consider the relationships between social changes and natural changes which became the back ground for the formation of feelings about nature among residents in Hakusan area.

Aged informants were aware of animal distributions in past years, knowing intimately their natural surroundings in the Hakusan area, and having had a strong interest in nature conservation. The author has been studying them for an ethnological survey on Yoshinodani-mura since 1978.

The author tried to analyze traditions and Japanese Monkey-lore of the people of Chugu Village through five informants, confirming especially the character of the aged informants, introduction of folklore surrounding the capture and eating of monkeys or customs of medical usage, and the awareness among residents of the relationships between monkey behaviours and weather changes.

In what ways will monkey-lore expand and change its aspect in the future? It is necessary to study the formation of lore, but valuations after research on Japanese Monkey-lore and comparisons have just begun.